

# 京極読書新聞 <第94号>

発行日 平成29年11月1日(水)  
京極町生涯学習センター湧学館

## 京極の歴史 入門編①

# 「脇方の鉱山」



▲大正8年頃、鉄鉱石発見場所で撮影された写真



京極の開基年は先人たちがワッカタサップの京極農場へ入植し、開拓の第一鍬を打ち下ろした明治30年（1897）です。開基120周年にちなみ、京極町教育委員会は10月17日に講演会「昔日の脇方 ワッカタサップと倶知安鉱山50年の歴史」を開催し、当時脇方にお住まいの方をはじめ、脇方の歴史に興味のある方々に多数ご参加いただきました。あらためて多くの方の心の中に脇方への郷愁の思いや、脇方郷土史への関心が強く残っていることに驚かされました。これをよい機会ととらえ、京極読書新聞に「京極の歴史 入門編」を随時掲載していきたいと考えています。まず今回のテーマは脇方の鉱山です。

この鉱山は明治31年に京極農場の小作人藤村徳治によって発見されました。当時、藤村はたまたま合わせたアイヌから、ワッカタサップ川の上流に鉱泉らしきものがあることを聞かされて、後日数人と共に探索したところ、鉱石らしい露頭を発見しました。その岩石の一部を持ち帰り鑑定を依頼しましたが、有望な褐鉄鉱であることが確認されました。これが脇方鉱山の端緒となりました。

その後、鉱山師朝倉夕満が鉱山の試掘権を獲得し、さらに東京の橋本組を経て、大正5年に三井鉱山の所有となり、本格的な試掘作業が開始されました。推定鉱量1000万トンの鉱山の開発は、製鉄産業発展のための大きな支えとなると期待されました。この後も、昭和44年に閉山するまでの間、北海道製鉄、日本製鋼所、輪西製鉄所、輪西鉱山、そして日鉄鉱業へと所有権が引き継がれていきました。



京極読書新聞は  
毎月1日発行予定です

▼ 2ページ目へ続きます

ここで鉱山に関わる主な出来事について紹介します。明治43年に倶知安村から独立して東倶知安村となり、字ワッカタサップ、字パーペナイ、字下目名、字カシブニの4つに区分されました。大正3年の第一次世界大戦勃発により、国内鉄鉱石の需要が高まるなか、大正8年に倶知安・京極間（13.4km）、大正9年に京極・脇方間（7.5km）に鉄道が開通しました。脇方の駅名は駅の近くをワッカタサップ川が流れていたことに因るものです。そんな折り、鉱山は第一次世界大戦後の経済界の大恐慌のおりを受けて、大正13年まで休山となりました。翌14年には鉱山の操業を開始して、不況下ながらも生産を維持していました。

昭和の時代に入ると、6年に満州事変、7年に上海事変が起こり、軍需工業の生産拡大が求められました。鉱山も採掘量の増産が要請され、終戦まで鉱山は全盛時代を迎えることになります。実際、昭和17年から19年の3年間は、毎年採掘量が50万トンを超えました。昭和19年には日鉄鉱業（株）北海道鉱業所倶知安鉱山と改称になり、そのころの脇方には、従業員と家族をあわせて4000人の人たちが居住し、未曾有の活況を呈しました。しかし、終戦を迎えると各地の鉱山は休山を余儀なくされ、倶知安鉱山も昭和21年には生産高が年間1万トンにまで激減しました。

昭和23年5月16日に脇方市街で火災が発生し、約2時間の間に34世帯27棟が全焼し、被災者136名に達する大火となりました。しかも日鉄鉱業本部事務所、鉱倉、脇方駅、機関車庫を焼き大きな損害を受けましたが、昭和26年には朝鮮戦争の影響で鉄鉱石の需要が急激に増え、これに伴い鉄鉱石も増産されて年間7万トンに回復しました。

このようにして、脇方の鉱山は内外の情勢に影響を受けながらも、操業を開始以来、50年間の月日にわたり稼働してきましたが、鉱山の宿命ともいえる鉱量の枯渇によって、昭和44年10月に半世紀の歴史を終えることになりました。



#### 【参考資料】

- 「京極町史」  
(京極町史編纂委員会)
- 「京極村史」(京極村)
- 「わっかたさっぷ」  
(佐々木六郎)
- 「倶知安50年の歩み」  
(日鉄鉱業株式会社北海道鉱業所)
- 「昔日の脇方 ワッカタサップと  
倶知安鉱山50年の歴史」  
(京極町教育委員会)

京極読書新聞

第95号へ続きます

## “壇の浦合戦”を考える(3) —平家の敗因をめぐって—

〈『平家物語』を読む会〉 村山 功一

### 2. 阿波民部重能裏切り説

前記(本紙第93号掲載) ii、iii を合わせて“阿波民部重能裏切り説”とします。

それまで平家に忠義を尽くしてきた民部重能であったが、屋島の合戦の際に子息田内左衛門が捕虜になっており、人質となった我が子を見捨てず裏切りを決断したとその動機が述べられています。その理由はともかく、重能は単に投降(抵抗を止め降伏すること)したのではなく、積極的に平家に攻撃を加え、さらに平家が極秘としていた作戦を源氏方にすべて漏らしてしまいます。この様子を見た四国、九州勢も次々と源氏方に付き平家軍団は崩壊します。平家軍の主力を成す阿波水軍がそっくり抜けて、残るは一門・一族とその家来だけになってしまいました。

この阿波民部の裏切りが事実とすれば、平家にとっての最大の敗因となるでしょう。いま〈事実とすれば〉と書いたのは、これに対する様々な見解があるからです。

まず富倉徳次郎\*(国文学)は、この裏切り行為を「特にそのことを記した実証的資料は見当たらないが『平家物語』の諸伝本がいずれもこのことを伝えているので事実のようである」と述べています。ちなみに、『源平盛衰記』など読み本系諸本には、合戦後鎌倉へ下った民部に対し頼朝は、彼の行為を武士にあるまじき卑劣な行為とし処刑したと書かれています。

一方、安田元久\*\* (歴史学) は、鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』に記録された壇の浦で捕虜となった武将の中の“民部茂良”を阿波民部重能とみて、味方となり源氏のために少なからず貢献した人物を“捕虜”にするはずはなく、彼は「最後まで平家とともに戦ったのち捕らわれたもの」と裏切り行為を否定しています。

片や物語、片や正史なのでこの場合正史に従うべきかもしれませんが。しかし『吾妻鏡』はなかなかの曲者です。この史書はしばしば、鎌倉幕府にとっての“不都合な真実”を無視・削除・歪曲していることが、多くの専門家によって指摘されているのです。

この点を考慮すると、頼朝(幕府)の立場としては裏切り者の手を借りた勝利を認めたくないため、捕虜として名を記しただけで、その経緯や詳細には故意に触れなかったのではないかと考えられます。したがって、『平家』諸本が伝えるように阿波民部重能の裏切りは事実ととらえる方が妥当かと思います。



源平盛衰記 (三田村信行/ポプラ社)

①おごる平家 ②源氏の逆襲 ③滅びゆくもの  
源氏と平家の繁栄と滅亡を描いた、スリルと迫力にあふれる冒険活劇物語です。小学高学年～

### 3. 義経の奇策説

阿波民部重能裏切り事件と同等、あるいはそれ以上に重大なのが源義経の奇策です。奇策というより見方によっては卑怯な“掟破り”ともとれる手段です。

午前中の平家勢の猛攻により壊滅の危機に瀕し、自身の命さえ危うくなった義経は、当時の合戦ではタブーとされていた非戦闘員(ここでは水夫や船頭)の殺傷を命じ、実行します。これによって平家側の兵船を操船不能にすることが目的です。この場面は本文ivに描かれていますが、やや不自然です。ivによれば、源氏の将兵が平家の船に乗り移ってから水夫(かこ)梶取(かんどり)を殺傷したように読み取れます。しかし、彼らを殺傷するのは操船不能にすることが目的なので、乗り移る前でなければならぬはず。ともあれ、全く予想もしなかったこの攻撃に平家軍は大混乱に陥ったのはいうまでもないでしょう。民部重能が裏切りを

▼ 4ページ目へ続きます

決意したとすれば、多分この時点だろうと思います。それまで士気も旺盛で統制のとれた合戦を展開し源氏を追い詰めていた平家軍に対し、反転攻撃を仕掛ける愚を、歴戦の民部重能が知らないはずはありません。一転し劣勢となった戦況が、民部にとっての絶好のチャンスとなったわけです。こうした彼の行動が、源氏方からも卑怯者とされ、後日処刑されたのではないかとされます。民部の裏切りが無かったとしても、義経の奇策の効果は絶大だったことでしょう。しかし、疑問が無いわけではありません。

それは、平家はなぜ義経と同様の戦法で反撃しなかったのか、ということです。長く朝廷を守る官軍として、そして今なお天皇と三種の神器を擁する平家のプライドが、非戦闘員殺傷という卑劣な行為を許さなかったのでしょうか。

たしかに、一瞬そうしたためらいはあったと思いますが、混乱から立ち直った平家軍も反撃を開始したはずですが、ただ、その時すでにかなり多数の平家の兵船が操船不能となっており、効果的な反撃が出来なかったのではないかとされます。『平家』には書かれていませんが、十分考えられることではないでしょうか。そして、もうひとつ。平家の反撃が功を奏しなかった重大な理由がありました。(以下次号)

(注)

\*富倉徳次郎

『平家物語全注釈 下巻(一)』角川書店

\*\*安田元久

「壇ノ浦海戦」(桑田忠親・監修『日本の合戦(一)』新人物往来社)

## 平成29年度「後志の文学講座」開催します

今年の「後志の文学講座」では、小樽にゆかりの深い著名な文学者石川啄木、小林多喜二、伊藤整の三人を取り上げます。啄木は明治40年、21歳のときに115日間小樽に滞在しましたし、多喜二と整はほぼ同じ時代を小樽で過ごしました。今回は小樽や後志の地で若き日を懸命に駆け抜けた三人のエピソードを紹介します。単に年表に沿うだけの話ではなくて、人間味あふれる三人の姿や生き方をお伝えしたいと考えています。

啄木は新聞社「小樽日報」に勤務しますが、新入社員として奮闘する様子が印象に残ります。数々の思い出と家族を小樽に残し、釧路に向かうまでの小樽日報時代を紹介します。

多喜二は薄幸な女性に思いを寄せますが、彼女への恋文を通して多喜二の心情を探ります。また、京極と関連のある小説「東俱知安行」にも触れていきます。

整については、学生時代の文学仲間との交遊録と上京するまでの中学校教員時代のエピソードを紹介いたします。

多くの皆様の参加をお待ちしています。

平成29年度「後志の文学講座」  
～小樽ゆかりの文学者ビッグスリー～  
『啄木・多喜二・整のよもやま話』

日時・内容：

11月24日(金) 18:30～19:30

「啄木の『小樽日報』時代」

12月8日(金) 18:30～19:30

「多喜二のラブレター」

12月22日(金) 18:30～19:30

「整の青春と交遊録」

会場：湧学館 2階 文化教室

定員：10名 (参加料 無料)

申込：11月1日(水)より湧学館で  
受け付けます(電話42-2700)

## 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京極町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.jp>

